報 告

オンライン訪問指導により回復期リハビリテーション病棟から早期在宅復帰に繋がった認知症を有する1例

朝川弘章† 玉村悠介 牟田博行
野﨑園子[1)2)] 錦見俊雄[3)]

IRYO Vol. 78 No. 3 (174－177) 2024

要旨 認知症を有する患者がリハビリテーション後に在宅復帰するためには，なじみのある安心できる生活を送ることが可能となる環境整備が必要である．超高齢社会となり認知症を有する患者が増加傾向にある我が国の医療分野において，病前生活に関する詳細な情報収集は必要不可欠である．当院の回復期リハビリテーション病棟では，患者の安全な在宅生活を提供するために，2020年6月より入院時の家屋訪問にInformation and Communication Technology (ICT) を活用した「オンライン家屋訪問指導」を実施している．家屋訪問にICTを活用することにより，家屋および院内から患者と家族をはじめ，医師，療法士，社会福祉士などの参加が可能となり，家屋情報や患者と家族の希望を多職種が視覚的にリアルタイムで共有できる利点がある．今回，回復期リハビリテーション病棟にて認知症を有する患者に対し，オンライン家屋訪問指導を実施した．

ICTを活用したことにより患者も在宅復帰に向けた治療に参画でき，行動・心理症状の軽減に繋がった．また，家屋情報や病前生活の情報を患者に関わるすべての医療職とリアルタイムに共有したことで，個別性の高いリハビリテーションの展開を図ることができ，認知面の改善に繋げることができた．さらにオンラインによる情報共有により，入院早期に退院後の在宅生活に必要な支援や環境整備などの準備ができ，早期に在宅復帰に繋げることができたため，考察を加えて報告する．

キーワード 情報通信技術（ICT），家屋訪問，回復期リハビリテーション，認知症

はじめに

回復期リハビリテーション病棟（回復期リハ病棟）は，患者の安全な在宅生活の提供に向けた医療サービスの提供と在宅復帰後の Quality of Life (QOL) を維持向上させる役割を担っている[1)]．超高齢社会となった我が国において認知症は増加傾向にあるとされており[2)]，認知症を有する患者においては安全な在宅生活の提供とQOLの維持向上のために患者ごとに個別性の高い治療戦略を組み立てることが必要である．

わかくさ竜間リハビリテーション病院 リハビリテーション部 1）診療部 リハビリテーション科 2）関西労災病院 脳神経内科 3）わかくさ竜間リハビリテーション病院 診療部 内科 †作業療法士
著者連絡先：朝川弘章 若弘会 わかくさ竜間リハビリテーション病院 リハビリテーション部
〒574-0012 大阪府大東市大字龍間1580
e-mail：asakawa55560@gmail.com
（2023年7月6日受付 2024年2月9日受理）
Case Report of a Patient with Dementia for whom Online Home-visit Guidance Led to Early Return Home from a Convalescent Rehabilitation Ward
Yusuke Tamamura, Hiroyuki Muta, Hiroaki Asakawa, Sonoko Nozaki[1)2)] and Toshio Nishikimi[3)]
Department of Rehabilitation 1）Division of Rehabilitation, Wakakusa-Tatsuma Rehabilitation Hospital 2）Kansai Rosai Hospital 3）Hospital Department of Medicine, Wakakusa-Tatsuma Rehabilitation
（Received Jul. 6, 2023, Accepted Feb. 9, 2024）
Key Words：Information and Communication Technology (ICT), home visit convalescence rehabilitation, dementia